麻生区における
地域人材コーディネート機能の解説書 （序章）

認定 NPO 法人 あさお市民活動サポートセンター
麻生区役所 まちづくり推進部 生涯学習支援課

令和2年3月

イラスト：イスナデザイン

目次

はじめに　P2

■1■　麻生区における地域人材コーディネート機能の促進に向けたノウハウ例

Q ＆ A

悩み①　ボランティアや活動の担い手が不足しています。　P3

悩み②　広報しても施設に人が集まりません。　P4

悩み③　世代間の交流を促しても、うまく進まないです。　P5

悩み④　そもそも地域に関心のある方はいるのでしょうか？　P6

ヒアリングごとのおもなポイント！　P7～9

■2■　各施設の概要とヒアリング内容

百合丘こども文化センター　P10～12
塚本千春館長

麻生市民交流館やまゆり　P13～17
植木昌昭理事長

麻生市民館岡上分館　P18～21
石川岳司分館長

黒川青少年野外活動センター　P22～25
野口透所長

相談窓口相談員による談話　P26～28
麻生市民館　金田学習相談員
あさお市民活動サポートセンター　原相談員
麻生区社会福祉協議会　西田職員

【資料1】　P29
地域デビューの相談窓口

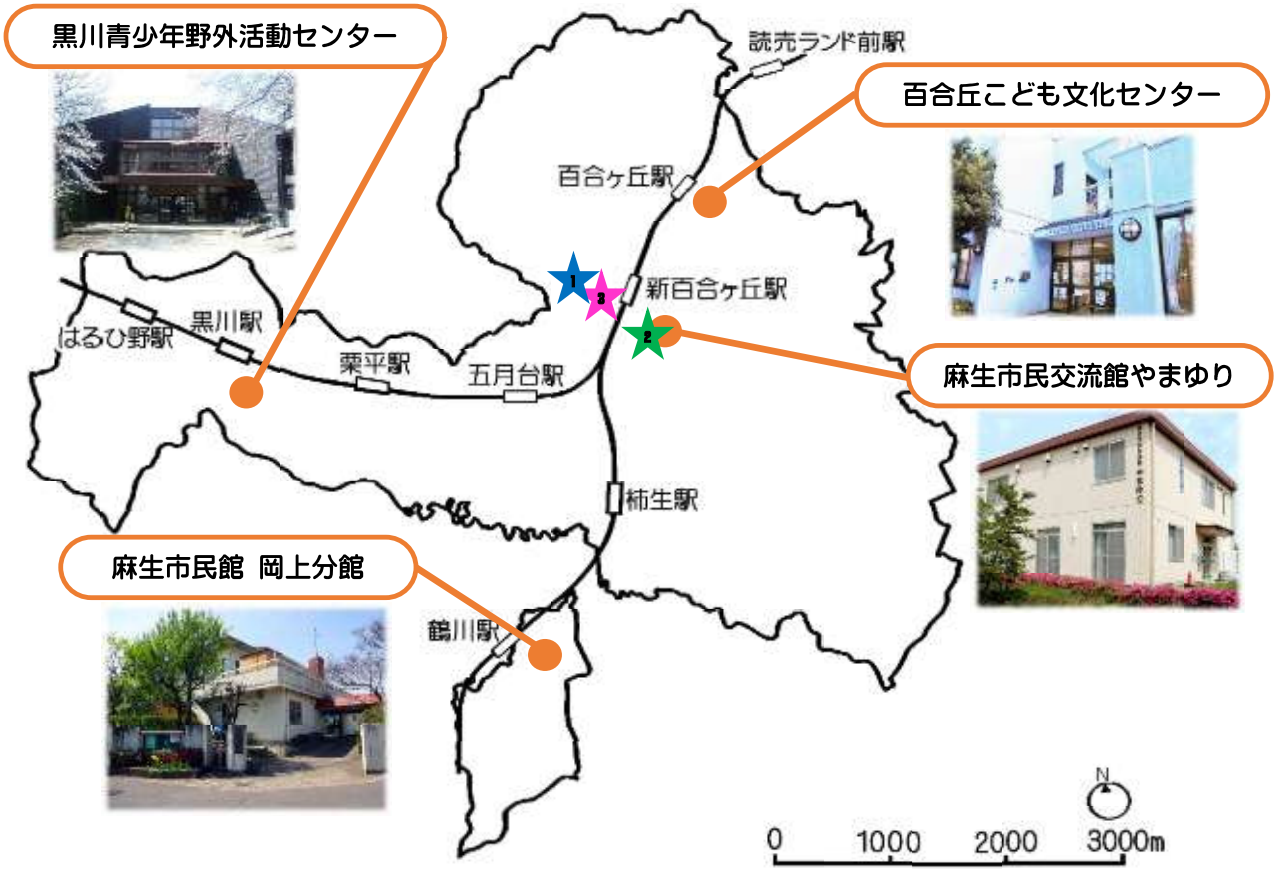
【資料2】　P30～34
麻生区における地域人材コーディネート機能の解説書作成に至る 経緯と報告について
麻生区役所　まちづくり推進部　生涯学習支援課

＜はじめに＞

本解説書は、令和元年度に、市民活動･生涯学習に係る４施設（百合丘こども文化センター、麻生市民交流館やまゆり、麻生市民館岡上分館、黒川青少年野外活動センター）へのヒアリングと、麻生区の地域デビューに関わる相談窓口（麻生市民館、麻生区社会福祉協議会、麻生市民交流館やまゆり）の相談員三者の談話を通じて、市民活動や生涯活動に係る施設や事業担当者に向けた「共通のノウハウ」としてまとめたものです。

今後、麻生区内の人と人、人と団体、団体と団体をつなぐといった「地域人材コーディネート」の取組を進めるにあたり、解説書として活用されることを期待します。

●ヒアリングの対象先は令和元年度麻生区地域人材育成連絡会議で選定し、インタビューアーは、あさお市民活動サポートセンターの理事が担当しました。



地域デビューの相談窓口

※ P29 チラシ参照

1 生涯学習相談コーナー
（麻生市民館）

2 市民活動相談窓口
（麻生市民交流館やまゆり）

3 ボランティア相談コーナー
（麻生区社会福祉協議会）

悩み①
ボランティアや活動の担い手が不足しています。

ボランティアが年々高齢化し、イベントや事業運営を手伝っていただける人が不足しています。いろいろな広報紙で、募集を呼びかけてもなかなか集まりません。どうしたらよいでしょうか？

答え①
身近な方に声をかけてみましょう。

ボランティアやイベントを手伝ってくださる方を見つけるには、広報紙で呼びかけるよりも、日ごろからお付き合いのある団体やメンバー、その家族など、**身近な方に声をかけることが有効です。**日ごろのフェイス トゥ フェイスのお付き合いが大切です。特に施設の担当者は、施設を利用している団体に目を向けてみてはいかがでしょうか。団体はそれぞれ得意な分野を持っています。声をかけることでご縁が生まれ、思わぬところから協力してくれる方が見つかるかもしれません。（P13）

日ごろの付き合いがなく、声をかける相手が身近にいない…　もしそのような悩みを抱えていましたら、**今行っている活動の幅を、自分のところ（施設内）に留まらず広げてみてはいかがでしょうか。**こども文化センターの例では、活動の範囲を地域の美化清掃やお祭りなどに広げたことで、施設の存在を知ってもらうことができ、そこから地域住民との交流が生まれ、新たな協力者の発掘につながったという話をいただきました。（P11）

一方で、**ボランティアの発掘を見据えた講座を開催するという方法も有効です。**やまゆりや岡上分館では、初心者でも参加できる講座を開くことによって、受講生同士が仲間となり、楽しい雰囲気のまま、団体の結成や施設を支える担い手に成長したという例もあります。将来のボランティアや活動の担い手につなげていくことを視野に入れて、講座を企画してみてはいかがでしょう。（P14、P19）

また、単に多くのボランティアを発掘するだけでなく、**ボランティアが定着するための土壌づくりも大切です。**　定着に有効な例として黒川青少年野外活動センターでは、イベント時、**ボランティアも参加者として一緒に楽しむ仕掛け**を考えているそうです。（P23）

やまゆりの運営スタッフの例では、**スタッフを続けるメリットの一つに「仲間の存在」**をあげていました。ボランティアを増やしたいのであれば、募集側が、協力してほしいことをただ羅列するだけでなく、**新しく入ったボランティアがその日一日を楽しく過ごせるために、どのようなサポート体制や、環境が必要なのか？**という、応募側のモチーベションをあげるという視点も必要です。（P16）

悩み②
広報しても施設に人が集まりません。

いろいろと広報しても人が集まりません。
どのような工夫をしたら、人が集まる魅力的な場所になるのでしょうか。

答え②
逆転の発想で、人を呼びこむ取り組みをはじめてみよう。

もともと環境がよくないから、立地がよくないから、という理由で、諦めていませんか。たとえ条件が悪くても、それを逆手にとって、人を集めることができるのかもしれません。黒川青少年野外活動センターは、団体利用の少ない冬季に、あえて大掛かりなイベントを開催し、年間を通じて多くの利用者を集めています。やまゆりでは、夜間に施設の一部を開放し、幅広いコミュニケーションができる場を提供し、イベント数の増加、ひいては入館者数の増加に結び付けています。悪い面だけ見て、**できない理由をあげて諦めてしまうのではなく、まずはアイデアを出してみてはいかがでしょうか。**その際は、自らの施設の特長［強み］を今一度振り返ってみることが有効です。（P13、P25）

また、施設の名称にこだわらず、**さまざまな世代へターゲットを広げることで、利用者増加につながる可能性もあります。**青少年対象の施設だから利用者は青少年のみ、シニアだから年配者だけ、という概念に捉われてしまうと、地域の隠れた需要を見逃してしまうかもしれません。「こども文化センター」では、子どもたちの利用が少ない時間帯に大人の団体も利用できるようにしたことで、イベントに協力してくれる音楽団体とのつながりが生まれた、という実例もあります。施設が想定する対象者のために、地域住民など周囲の方がサポートできる環境を創り出すという発想も、これからの時代には求められています。（P10、P22）

ハード面でも工夫が必要です。今までは、施設利用の目的の多くは会議や講座などで、机や椅子が常備されているというイメージでしたが、今は、体操や音楽など、**どんな形態の活動でも対応できるような「フリースペース」が求められている**との話をいただきました。岡上分館では、はじめから集会室の机や椅子を収納しておくことによって、利用形態が変化し、結果、利用率があがったそうです。（P21）

最後に、なによりも大事なことは、**失敗を恐れず、とりあえず試しに何かをやってみる**ということです。ヒアリングでも「実験扱いだから気楽にできた」「経験したからこそ分かったことがあった」という話を聞きました。試行でもいいので、まずははじめてみる。その結果、良い点も悪い点も気付くことができます。もちろん、新しい取り組みは失敗をすることもあります。しかし、失敗も貴重な財産です。失敗から改善を重ねることで、人を集めるノウハウを自ら掴んでいくことができるのです。（P15、P25）

悩み③
世代間の交流を促しても、うまく進まないです。

施設の事業は、いつも同じ世代で固まりがち。若い方がなかなか入ってきません。異なる世代を一緒の活動へと促していくには、どのようにしたらいいのでしょうか。

答え③
つながる“ヒント”はきっとあります。たとえば・・・

世代によって、価値観も考え方もバラバラ。同じ年代で固まっていた方が気楽なので、異なる世代が混ざり合うのは難しい。しかし、つなげるヒントはきっとあります。

こども文化センターでは、イベントのテーマを「折り紙」に絞り、折り紙が好きな子どもと高齢者を集めることに成功しました。**ターゲットを絞る、お互いに興味を持ちそうなテーマを掲げる、というところに、世代を繋ぐヒントがありそうです。**（P11）

また、**技術の習得という目的で、世代間のつながりが生まれることもあります。**黒川青少年野外活動センターの話では、技術を覚えると人に教えたくなる、そこから、次の世代へと覚えた技術を伝承する流れ、“師弟関係”が生まれるという話をいただきました。（P22）

一方で、**団体同士でも、ベテラン世代の方を講師として招いて、若い世代の団体が先人の知恵や経験を学ぶという形も、一種の世代間交流ともいえそうです。**団体の後継者不足の課題がよくあげられていますが、団体の形が残らなくても、団体の知恵や経験が、新しい団体に引き継がれていくのであれば、地域にとって大変価値のあることだと思います。もし、担い手不足の団体の存続に困っているのであれば、次世代を担う新しい団体に活動の“思い”や知恵、経験を託していく、という方向性も、選択肢の一つに加えてもよいのかもしれません。（P21）

事業担当者は、**若い世代や子どもの参加を促す講座やイベントを長期にわたって続けていくことも大切です。**岡上分館からは、講座のターゲットを子どもにすることで、子どもの親や祖父母世代を活動に巻き込んでいくことに加え、子どもたち自身を数年先、数十年先の運営協力者として育てていくという、先のビジョンを意識した話をいただきました。子どものころに体験した記憶や思い出が、将来大人になってから、協力してみよう、手伝ってみようという気持ちを起こさせるのかもしれません。（P19）

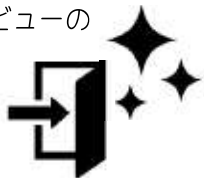
ただし、事業を長く続けるとはいえ、ただ前回の手法をそのまま踏襲するのではなく、**その時々のニーズに応じて変化を加え、試行錯誤を繰り返していくことが大切です。**
世代間交流の取り組みは、すぐに効果が表れず、やきもきすることもあるかと思いますが、長い目で、粘り強く続けていくことが、ポイントだといえそうです。

悩み④
そもそも地域に関心のある方はいるのでしょうか？

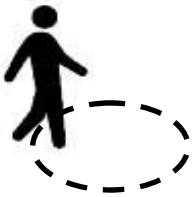
「地域人材」の言葉が並んでいますが、机の上の理想ではないのでしょうか。多くの方は、日々の生活を送ることに精一杯で、地域に関心がないと思いますが。

答え④
麻生区には“地域人財”が沢山いらっしゃいます。

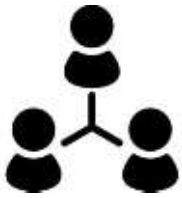
“川崎都民”との言葉があるように、麻生区は昼夜間人口比率が低く、昼間は都内に通勤、通学する方が大勢いらっしゃいます。また、昨今の時代背景から、60 代、70 代になっても働き続ける方が増え、地域に関わる時間や余裕のある方は減っている、という声も多く聞かれます。



それでも、麻生区では、地域の活動へと参加を促していくために、地域デビューの相談窓口をはじめ、市民活動団体の検索サイト、町会･自治会への加入促進など、さまざまな取り組みがなされています。相談窓口のヒアリングでは、**そのノウハウとして「敷居を低くすること」「背中を後押しすること」があげられました。**（P28）



一般的に地域デビューは敷居（ハードル）が高いというイメージがあります。しかし、家庭の延長上に地域がある、暮らしと地域は密接につながっているという感覚を持つことができれば、その敷居は断然低くなるのかもしれません。黒川青少年野外活動センターでは、人生を豊かにするために、講座やイベントで学んだ技術を、日常の生活でも実践できるようなプログラムを企画していました。**日常からはみ出して、ちょっと活動できる受け皿をつくる。**はじめの 1 歩のアクションを起こしたら、やまゆりの地域デビュー講座の事例のように、地域の新しい仲間とつながり、うまく回転していくのだと思います。（P14、P23）



受け皿をつくる一方で、地域デビューを躊躇している方への「後押し」が大事です。相談窓口の例では、**良い意味で“おせっかい”な相談員が連携しながら、相談者の思いに寄り添って話を伺っている**とのことでした。相談窓口は常に地域にアンテナを張って、こちらの施設にはないけれど、あちらの施設に相談したら見つかるのかもしれませんね、というように、次につなげる案内が必要ではないでしょうか。その際、職員だけで解決しようとするのではなく、**地域で活躍するボランティアや団体のネットワークの力を借りることも有効な手段だと思います。**（P26）

最後に、**居場所づくりという視点も一つのポイントになります。**相談窓口のヒアリングでは、相談員を続けている理由として、周りのメンバーから刺激を受けている、それが居心地の良さにつながっているとの話がありました。家や職場、学校ではない、第三の居場所。血縁関係もなく、利害関係もないなかで、ふらっと寄れて、気軽にお話ができる場所。地域の人材を巻き込んでいきたいのであれば、そんな**居心地の良い場所を地域のなかに創り出してみることに、チャレンジしてみてはいかがでしょうか**。きっと、さまざまなバックボーンをもった“地域人財”が、集まってくるでしょう。（P27）

ヒアリングごとのおもなポイント！

百合丘こども文化センター　P 10 ～ 12

* ボランティア
・子どものころからの利用者に声かけをする。
・団体利用者から協力の申し出がある。
・ボランティアの募集は、広報紙よりふだんお付き合いしている方が安心である。

* イベントの企画・運営
・地域の方から企画案が出てそれに答える。
・異文化交流（アメリカ、フランス）「わくわくプラザ」の父兄と。
・多世代交流　ターゲットを絞り「いこいの家」と折り紙大会を開催。
・ディサービスの訪問活動等を通じて周辺にセンターの存在を知ってもらえた。
・イベント当日の担い手は団体利用の運営協議会メンバーに依頼する。

* 地域に密着した運動
・年末の館内、公園周辺の清掃、クリーンボランティア大作戦。
館から商店街、消防署等へ範囲を広げ地域デビューを促す。

麻生市民交流館やまゆり　P 13 ～ 17

* サロン文化
・交流手段として夜間使用可能として幅広いコミュニケーションを実現。
・イベントの開催できる環境整え、夜間、土日の利用で利用率 90%に。

* 市民活動支援
・ボランティアの高齢化。付き合いのあるシニア団体に声をかける。
・フェイストウフェイスの付き合いが大切。
・人と団体を繋ぐには双方のことを良く知る。
・はじめの一押しが大事（やまゆりのの役割）。
・区民講師公開講座　講師と受講生で新たな団体を立ち上げる。
・区民記者は区民の視点で地域の情報を発信。冊子化。

* 目指せ！アクティブシニアたちのセミナー
・講座終了後に受講生同士でグループ化。
・開催日を参加しやすいように平日から土曜日の開催に変更。

* ボランティアの運営
・思いを共感した人に参加してもらう。
・アクティブシニア講座の受講生から運営スタッフに新しい出会いがある。
・多様な考えを受け入れる雰囲気作り。
・プラスの楽しみ。

* 団体と個人への支援
・高齢化の悩み・・団体からのアイデアや変わろうという意思が無いとサポート困難。
・個人もまずははじめてみようという本人の気持ちが大切。

* これからの役割
・コミニュテイづくりのエンジン役、人と人、人と団体、団体と団体。
・利用者さんの選択肢を増やしてあげる。
・団体と地域のニーズをつなげていく。

麻生市民館 岡上分館　P 18 ～ 21

* 社会教育施設
・地域と連携する。小学校の図書館、岡上ふれあい祭り等地域一体で世代を超え交流。
・認知度が低いため閉館後も外の掲示板にチラシを置いている。
・続けることが大事である。

* 地域の活性化促進
・小学生向けの講座開催し子どもにも親しんでもらう施設に。
・農家さんの協力で地場野菜から健康を学ぶ講座開催。料理サークルが立ち上がる。

* 講座
・子どもが参加できる講座を開いている。
・若い世代がサークルを作り、ベテランの世代を講師として招くと世代間のつながりができる。
・お手伝いできるところは「きっかけ作り」まで。
・職員が交代するため長期の計画が必要。

* 部屋
・ハード面ではフリースペースが求められている。

黒川青少年野外活動センター　P 22 ～ 25

* 施設利用者
・平日は市民館的活動、土日はアウトドア。
・幼児から母親へ。キャンプ事業への理解。シニアは事業のサポート役に。
・利用者の幅を広げることで、青少年団体利用が増加。

* イベント開催（年 2 回）
・スタッフは利用団体メンバー。
・長年続けることで利用団体間の活動を理解できる。
・自然体験は上級者から次の世代へ伝わる。
・団体さんに主体性を持ってもらい、スタッフも参加者として楽しむ仕掛け
・冬の集客として「大鍋まつり」開催。食育につなげる。

* 講座（ネイチャー）
・座学は少ない。
・シニアのアウトドアは仲間作りにもなる。
・ブッシュクラフトの指導者講習会。

* 活動は非日常体験
・家庭での活用、日常に取り入れることでコミュケーションが増える。

* 災害関係講座
・受講したことを覚えると、使いたくなる。
・アイデア、発想が大事。

* ボランテイアスタッフ
・参加者のお父さんを巻き込む。
・参加者が資格を取り職員になった例も。
・麹からの味噌作りは周辺にも広がる。

* 次世代に向けた取り組み
・大学生が興味を示している集まる人のつながりが大事。
・ベテランも大事、若い指導者も育てて下の世代のチームを作る。
・自然の豊かさを活かして応援団を増やす。

地域デビューの相談窓口相談員による談話　P 26 ～ 28

* 各相談窓口の特徴

・**麻生市民活動サポートセンター**
市民活動を中心に相談、グループ、人のつながりで紹介。
紹介が活動に結び付いていたか否か調査できないのが残念。

・**麻生市民館**
カルチャー的な相談が多い（何かを習いたい、何かをはじめたい）。
情報提供に留めている。

・**麻生社会福祉協議会**
ボランティアの相談員と社会福祉協議会が共同で相談を担当している。
ボランティアの紹介が多い。
ボランティア相談員：相談者の思いを受け取り、情報を提供。
職員だけでなく地域の方、ボランティアさんのネットワークが必要。

* 難しい面

・情報の更新。情報のアップデート。

* 相談窓口を開いていて良かったこと

・相談者がサークルを紹介したあと、表情が明るくなった。
・不要になった能の衣装→サークルに紹介したところ、衣装が大事に引き継がれた。
・自宅に実った変わった柿を紹介したいと相談→メディアに繋いで地方情報誌に掲載された。
・ご夫婦で相談に→付き添いで来所した旦那さんが運転ボランティアに。

* 相談員を続けている理由

・ある程度おせっかいな性格。
・自分の居場所になっている。
・メンバーからの刺激。居心地が良い。
・アンテナを張っている集団で検索サイト以外にも情報網がある。自分も勉強になる。

* はじめのアプローチ

・相談に来られた方のボランティア観を探ることからはじめる。
・市民館は「よろず承り」。井戸端会議の雰囲気に持っていき希望のメニューを提示。
・相談員は好奇心旺盛なひとが多い。

* 区民へのアプローチは

・ちょっと立ち寄って話せる環境が必要。
・他の事業と関連付けながら「ターゲット」を絞った広報が必要か。
・学習相談員は敷居を低くしてあげる、ハードルが高いイメージを無くする。
・先輩から後押しをする。
・ハードルを下げる、後押しをする→地域デビューへの「はじめの１歩」へとつなげる。

■地域デビュー

★地域で行われている活動に初めて参加し、
地域とのつながりをつくること。
★人生 100 年時代、地域で活動することは、
健康寿命の延伸に効果的であるといわれています。